

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究

小 松 謙

京都府立大學

一 石渠閣補刻本に關わる從來の議論

『水滸傳』石渠閣補刻本は、これまで多くの毀譽褒貶にさらされてきた。これは、鄭振鐸の主導の下、王利器と吳曉鈴が校訂を加えて、北京人民出版社から一九五四年に刊行された『水滸全傳』の影響によるところが大きい。この書の序文で鄭振鐸は、自身が第五十一回から第五十五回までを所藏する版本を「武定侯郭勛刻本」とし、これが現存最古の刊本だが一部しか残っていないため、それに次いで古い「明萬曆十七年己丑（一五八九年）天都外臣（汪道昆）序刻本」を底本として使用すると述べている。この「天都外臣序刻本」こそ、石渠閣補刻本にほかならない。なお、

鄭振鐸も同刊本については、「其中不少篇頁、是清康熙間石渠閣補刻的。有的補刻篇頁、似更在其後。在那些補刻的篇頁中、還沒有多大的竄改之跡、可能補刻時還是根據一部初印本的（その中の多くの葉は、清の康熙年間に石渠閣が補刻したものである。一部の補刻葉は、更に後のもののように思われる。それら補刻葉の中には、大きな改變の形跡は認められない。補刻した時には初印本に基づいていたのかもしれない）」と、石渠閣の補刻葉を多數含むことを認めている。

白話文學研究の權威であり、國家的重要人物であつた鄭振鐸の發言だけに、この記述は大きな影響を持ち續けた。しかし、次第にこれを疑問視する意見が出始めた。この點については、高島俊男氏が「水滸傳『石渠閣補刻本』研究序説^①」で述べている通りであり、詳細は同論文に委ねるとして、ここでは高島氏の所説の要點のみを述べておきたい。

まず、鄭振鐸が自身の所藏する殘本を「武定侯郭勛刊本」、つまり記録に残る限り最も古い刊本である武定侯郭勛（一四七五―一五四二）によつて刊行された版本（以下「郭武定本」と呼ぶ）そのものであるとしたことには根據が

ない。

次に「天都外臣序刻本」については、一九八三年八月二日の『光明日報』に掲載された吳曉鈴「漫談天都外臣序本《忠義水滸傳》——雙槓撥瑣之四^②」をあげて、「萬曆己丑孟冬天都外臣撰」とされてきた序（『水滸傳敘』末尾の一行が、實は切り取られて端しか見えないものから憶測によって復元したものであることを論じ、更に聶紺弩氏がこの序文の内容は周亮工『書影』や全傳本に附された「發凡^③」の切り貼りからできていると論じていることを支持して、序文は清代に書かれたものであって、石渠閣補刻本が天都外臣序本とは認められないとする。

石渠閣補刻本については、原本を見ていない以上、鄭振鐸らの『水滸全傳』校勘記に依據して推定するしかないが、「模糊」な部分が非常に多く、數行にわたってほとんど讀み取れない部分もあるらしいこと、各卷（全卷ではない）巻首にあるという「李卓吾評閱」は前後と字體が異なると記されていることから考えて、石渠閣より後のものである可能性が高いことを指摘し、また補刻部分の版心にある

『水滸傳』石渠閣補刻本文の研究（小松）

「石渠閣補」という文字を削り落とした形跡があること、第八十八回に全く異なる體裁の葉があると校記にあることから、「明萬曆年間にある書肆が刊刻し相當使用してかなり傷んだ原板を、清初に石渠閣が手に入れ、補刊して用い」、その後も何度も補刊が繰り返された本とする。

もう一人、この問題について論じているのは馬幼垣氏である。馬氏は石渠閣補刻本のマイクロフィルムを入手し、「問題重重的所謂天都外臣序本《水滸傳》」（『水滸二論』〔三聯書店二〇〇七〕一〇〇～一〇三頁）においてこの問題について論じている。

馬氏の結論は簡單なものである。馬氏は、高島氏同様に排印本『水滸全傳』を批判した上で、補刻の多さ（合計三百九十九葉半）と「模糊」な文字（三十八葉分）の數値（これは馬氏があげる數である。正確な數値については、本誌掲載の上原究一・荒木達雄兩氏の論文を參照）をあげ、「這箇千瘡百孔的本子根本就不得我們理會（こんな傷だらけの本は全く相手にするに値しない）」と切り捨てている。

ここから見て取れるのは、石渠閣補刻本の研究が排印本

『水滸全傳』と常に結びつけて論じられてきたことである。石渠閣補刻本の重要性を強調するために、鄭振鐸らのはつきり見えない「天都外臣」について強辯したこと、その後も本文を公開しなかったことが、このテキストに決定的なマイナスイメージを植え付ける結果になったことは明らかである。

とはいえ、高島氏の議論は、當時目にするのが可能であった資料の限りにおいて最善のものといつてよい。原本に基づかず、校注のみに依據して議論しているため、不十分な点もあるが、これは致し方ないこととしかいいようがない。一方的に無価値と決めつけることなく、結びで「石渠閣補刊本、および未公開の容與堂諸本の影印本刊行が待たれる。それを得て、石渠閣補刊本原刊部分の位置づけはさらに明確になるであろう」と述べるのは、まことに適切な意見である。

一方、馬幼垣氏の議論には問題が多い。馬氏は、さきにふれた鄭振鐸舊藏の殘本などのいわゆる「嘉靖本」（現在は鄭氏舊藏の第五十一〜第五十五回到第四十七〜第四十九回を加

えて中國國家圖書館に所藏されている）について、さほどの根據もなく「劣極的垃圾本（劣悪極まりないゴミ本）」という評價を下したことがあるが、これは荒木達雄氏が述べるように、明らかに不適切な見解であり、嘉靖本はミスの多いテキストではあるが、容與堂本より早い時期の本文を伝えられていることは明らかである。⁷⁾馬氏は補刻の多さ、文字の「模糊」をもつて石渠閣補刻本の価値を否定するが、補刻の内容が正確であれば、骨董的価値はともかくとして、本文研究におけるこの版本の価値は決して減じないことになる。

馬氏は「翻刻書籍并無不許改動或規定改動程度的限制、若非祖本和翻刻之本并存、何由判斷翻刻之本確忠于祖本？容與堂本和鍾批本雖同屬一系統（都後置閣婆惜故事）、不就分別不少嗎？（書籍を翻刻するに當たつては、改變を許さない、もしくは改變程度の制限を規定するというものではなくないのであつて、祖本と翻刻本がともに現存するのだければ、翻刻本が祖本に忠實であると判斷する手だてではない。容與堂本と鍾批本〔鍾伯敬批評四知館本のこと〕は同一系統に屬してはいるが（と

もに閻婆惜のことを後に置く)、多くの違いがあるではないか」と述べる。ここで容與堂本と四知館本の間に「分別不少」というのは不可解である。建陽楊氏が刊行した四知館本は容與堂本の非常に忠實な翻刻である。建陽の刊本としては例外的といってよい高い水準を持ち、覆刻ではないにもかかわらず、文字の異同はほとんどなく、誤字脱字も極めて少ない。ただ、一致するのは天理圖書館藏の「容與堂本」(實際の刊行者は容與堂ではないものと思われる)であって、一般に影印が流布している中國國家圖書館藏本とは少數ながら異同がある。馬氏のこの敘述は、本文校勘を行わずに論じていることを思わせるものである。石渠閣補刻本についても同様であり、馬氏が問題にしているのはすべて外形上のことであって、マイクロフィルムを入手しながら、本文については全く問題にしていない。

近年になって、更に石渠閣補刻本に關する新たな研究が出現した。氏岡真士氏の「石渠閣補刻本《水滸》平議」(信州大學人文科學論集)四(二〇一七年三月)。以下「氏岡論文」と略稱)と荒木達雄氏の「石渠閣出版活動と《水滸

『水滸傳』石渠閣補刻本文の研究(小松)

傳》之補刻」(《漢學研究》第三十五卷第三期(二〇一七年九月))である。

氏岡氏は、後にふれるように、嘉靖本との關係を中心に、他の刊本との關わりも踏まえて馬幼垣氏の意見を否定し、補刻部分にもかなりの信頼性があるとする。氏岡氏はおそらく中國國家圖書館藏本を詳細に調査したものと思われ、その見解には説得力がある。詳しくは後文でふれたい。一方荒木氏の見解は次のようなものである(原文中國語)。

「馬教授は補修ゆえに信頼できないとするが、補修部分の出處と信頼性も改めて問題にするに値するものと思われる。序文・補刻・發見過程といった外部要因だけで軽々しくテキスト自體の研究價値を否定すべきではない」。その上で、石渠閣が明末清初に入手した版本をもとに補修を加えて刊行することにより出版事業を展開してきた書坊であること、その際には原本に忠實に覆刻していたことを論じ、さまざまに刊行の過程を想定した上で、最終段階については、「この時石渠閣は他本を参照せず、原本のみに依據して補刻を進めた可能性が非常に高い」とする。

問題は、補刻葉が原本に忠實な覆刻であるかという點にある。その上で、石渠閣補刻本の本文の位置づけを行わねばならない。そのためには、原本の全面的な調査が不可欠である。しかしこれまで、馬幼垣氏のようにマイクロフィルムを入手した例はあるものの、一般の研究者にとっては、石渠閣補刻本は北京の中國國家圖書館に行かねば見ることでできないものであり、當然ながら、おびただしい時間を要する全文校勘などは望み得ない状況にあった。^⑧しかし、本誌掲載の「日本傳存の石渠閣補刻本『忠義水滸傳』發見の経緯」で述べたような事情で、京都大學の平田昌司氏が第三回以降の全文を具えた刊本を入手され、詳しい調査を許可していただいたことにより、第三回以降の全文の詳細な調査が可能になり、筆者は第三回から第七十一回までについて、全文の完全な校勘を行った。以下、その結果をもとに石渠閣補刻本の位置づけを試みたい。

敘述の便宜上、本論でふれる『水滸傳』の主要版本を以下の略稱で呼ぶことにする。(一)内は本文對照の際に使用する略稱である。^⑨

・石渠閣補刻本…石渠閣本(石)。本論文で扱うのは原則として平田氏藏本であり、中國國家圖書館藏本に言及する際には、そのことを明記することとする。

・中國國家圖書館藏容與堂本(請求番號一七三五八)…單に「容與堂本」とする時はこの版本を指す。容與堂本系統の刊本を區別する際には「北京本」と呼稱する。

・内閣文庫藏容與堂本…内閣本。

・天理圖書館藏容與堂本…天理本。

・無窮會藏田文庫藏本…無窮會藏本(無)。

・『忠義水滸全傳』(神山閏次舊藏本)…百二十回本(神)。

・『第五才子書施耐庵水滸傳』…金聖歎本(金)。

この他、芥子園本(芥)・四知館本などについては、略稱は使用しない。

二 石渠閣補刻本の性格

本文に入る前に、まず全體的な面からこのテキストの性格について考えておきたい。書誌的な問題については、本誌に同時収録される上原究一・荒木達雄兩氏の論文(以下

「上原・荒木論文」と略稱)において詳細に述べられているので、ここでは状況から考えられることを簡単に述べるにとどめる。

今回調査した平田氏所藏の石渠閣本は、すでに述べたように第三回以前を缺く。それゆえ、巻頭の状況は不明である。ただ、上原・荒木論文が論じているように中國國家圖書館藏本と同版である以上、巻頭にはやはり挿繪と「水滸傳敍」があつたに違いない。そして、中國國家圖書館藏本「敍」の最後に記された文字の斷片は、やはり上原・荒木論文で詳しく論じているように、「萬曆己丑孟冬天都外臣撰」の名残である蓋然性が高島氏が否定するほど低いわけではない。確實に「天都外臣」とあるとまでは斷定できないが、その可能性は十分にある。

序にこの署名があるとすれば、このテキストこそ天都外臣序本にほかならないように見える。ここで「天都外臣序本」について確認しておこう。この本に關する唯一の記述は、沈徳符(一五七八―一六四二)の『萬曆野獲編』卷五「動戚」「武定侯進公」に見える次の記事である。

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究(小松)

武定侯郭勛、在世宗朝、號好文多藝能計數。今新安所刻水滸傳善本、即其家所傳。前有汪太函序、託名天都外臣者。

武定侯郭勛(勳)は「勳」の異體字。郭勛の名はしばしば「郭勳」と表記される)は、世宗(嘉靖帝)朝にあつて、文學を好み、多藝、はかりごとにすぐれると稱されていた。いま新安(徽州)で刊刻されている『水滸傳』の善本は、その家に傳つたものである。前に「天都外臣」というペンネームを使用した汪太函(道昆)の序がついている。

「新安所刻水滸傳善本、即其家所傳」といふ言ひ方は、郭勛の家に傳つたテキストをもとに新安で「水滸傳善本」を刊刻したことを意味するものと思われる。「其家所傳」といふのは、おそらく郭武定本を意味するものである。『萬曆野獲編』は沈徳符が折にふれて書いた記事をとめたものであり、當然この條がいつ書かれたかも不明だが、序の日付は萬曆三十四年(一六〇六)であり、郭勛が失脚した嘉靖二十年(一五四二)から六十年以上を經てい

る。そして、『雍熙樂府』が宦官春山の序を伴う覆刻に置き換えられ、郭勛の名はすべて抹殺されたこと^⑪から考えて、郭勛失脚後も郭武定本がその名で流布し続けたとは考えにくい。従って、ここでのいうのは武定侯の家（嘉靖二十九年〔一五五〇〕には早くも郭勛の長子郭守乾が武定侯襲爵を許されている^⑫）に伝わっていた郭武定本ということかと推定される。實際、萬曆以後にあつて郭武定本の實物を見たという例はなく、その實態については憶測に基づく信賴性の低い發言しか残されていない^⑬。逆に言うと、沈德符の發言の信賴性にも疑問が残ることになるわけではあるが、ともあれこの記事を信じれば、「天都外臣序」を持つ本は郭武定本の直系ということになる。

従つて、巻頭に確かに「天都外臣」による「水滸傳敘」がある石渠閣本は、沈德符が言う天都外臣序本にほかならないように思われる。ただ、ここで問題になるのは、先にあげた聶紺弩氏と高島氏の指摘である。兩氏は、「水滸傳敘」は周亮工『書影』や全傳本「發凡」の貼り合わせによつて作られていると論じており、もしそうであるとすれば、

當然ながら『書影』の序文の日付である康熙六年（一六六七）以降のものということになる。その場合、これも當然ながらこの序は汪道昆（一五二五〜一五九三）が書いたものではありえず、兩氏が述べるように、清朝のある時期に「天都外臣」の名のもとに捏造されたものと考えざるをえない。

上原・荒木論文で述べているように、中國國家圖書館藏の石渠閣本に附されている挿繪は、馬幼垣氏が論じる通り、明らかに容與堂本の挿繪のやや簡略化された模刻である。馬氏はこれも石渠閣本の質の低さを示すものとするのだが、序文・挿繪は、冒頭十回と第二十二・四十三・六十二・八十二回の回頭に挿入されている「李卓吾評閱」の文字と同様、補刻時（いつかは定かではない。石渠閣が行つた補刻より後である可能性は高そうである）に、商品價値を増すために附け加えられた可能性が高い。序が後から附けられたものであるとすれば、これも同様に商品價値を増すために行われた行爲ということになる。

しかし、上原・荒木論文で述べるように、中國國家圖書

館藏本の序文は少なくとも石渠閣による康熙五年の補刻よりは摩耗が進んでおり、かなり古い、あるいは原刻時から存在したのではないかとも考えられるものである。とすると、後から捏造したものとは考えにくくなる。實際、これも上原・荒木論文が論じているように、高島氏とは逆に、この序の記述をもとにして百二十回本の「發凡」と周亮工の『書影』が書かれたと考えることも、特に周亮工が書坊として名高い金陵周氏の出身であり、周氏と石渠閣の間に關係があつたことを考慮すれば、十分に可能なのである。

問題になる部分は「水滸傳敘」の次の一節である。

故老傳聞、洪武初、越人羅氏詭誕多智、爲此書共一百回。各以妖異之語引於其首、以爲之艷。嘉靖時郭武定重刻其書、削去致語、獨存本傳。余猶及見燈花婆婆數種、極其蒜酪、餘皆散佚、既已可恨。自此版者漸多、復爲村學究所損益。蓋損其科諱形容之妙、而益以淮西河北事。楮豹之文而畫蛇之足、豈非此書之再厄乎。近有好事者、憾致語不能復收、乃求本傳善本校之、一從其舊以付梓。

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

古老の傳聞によれば、洪武の初め、越の人羅氏はユーモアと智慧に富み、全百回のこの書を作った。それぞれ妖異の話を冒頭に置いて、序段とした。嘉靖年間に郭武定がこの書を重刻し、「致語」を削つて、本傳だけを残した。私はまだ「燈花婆婆」など數種を見ることができたが、金元の北曲の風格を強く具えたものあつたので、その他が皆散佚してしまったのは、それだけでも残念なことである。それ以後刊行するものが次第に多くなり、更に田舎インテリが増減を加えた。思うに、減らしたのはユーモアや形容の面白さであり、増したのは淮西の王慶・河北の田虎のことだったのである。豹の模様を塗り、蛇に足を描き加える類の行爲で、この書が再び災難にあつたというものではあるまいか。最近物好きな人が、「致語」を復活させることがもはやできないのを残念に思い、そこで本傳の部分の善本を求めて校訂し、原型通りに刊行したのである。

高島氏が指摘しているように、この記述の一部とほぼ同

内容のものが百二十回本の「發凡」¹⁵⁾と周亮工の『書影』卷一¹⁶⁾に見える。「發凡」の記述は以下の通りである。

古本有羅氏致語、相傳燈花婆婆等事、既不可復見、乃後人有因四大寇之拘而酌損之者、有嫌一百二十回之繁而淘汰者、皆失。郭武定本、即移置閻婆事甚善、其於寇中去王田而加遼國、猶此小家照應之法。

古本には羅氏の「致語」があり、「燈花婆婆」などのことだったというが、もう見ることはできなくなつてしまつたというのに、後人に「四大寇（宋江・王慶・田虎・方臘）」に問題があるというので減らしたり、百二十回は多すぎるというので削除したりする者がいるが、いずれも誤りである。郭武定本は、閻婆のこと移動させたのは非常によいが、四大寇の中から王慶と田虎を抜いて遼國を加えたのはつまらない作家の照應法といふべきものである。

周亮工『書影』卷一に見える記事は以下の通りである。

故老傳聞、羅氏爲水滸傳一百回、各以妖異語引其首。嘉靖時、郭武定重刻其書、削其致語、獨存本傳。金壇

王氏小品中亦云、此書回前各有楔子、今俱不傳。予見建陽書坊中所刻諸書、節縮紙板、求其易售、諸書多被刊落。

古老の傳聞によれば、羅氏は『水滸傳』百回を作り、それぞれ妖異の話を冒頭においた。嘉靖年間に郭武定がこの書を重刻し、「致語」を削つて、本傳だけを殘した。金壇の王氏（王彥泓〔次回〕）の小品にも「この書の各回の前には楔子があつたのだが、いまではすべて失われた」とある。私が見るところ、建陽の書坊で刊行された書物は、紙や版木を節約して、賣れ行きをよくするために、多くの書物が内容をカットされてい

る。高島氏は、「水滸傳敘」はこの二篇を組み合わせて捏造されたものだとする。ただ、三者を並べてみると、その點に疑問が生じる。三者が直接關係する部分を並列してみよう。

敘 …故老傳聞、洪武初、越人羅氏詭誕多智、爲此書共一

書影…故老傳聞、

羅氏

爲水滸傳一

發凡… 古本有

羅氏致語、

百回。各以妖異之語引於其首、以爲之艷。嘉靖時郭武定重
百回、各以妖異 語 引其首。 嘉靖時郭武定重

刻其書、削其致語、獨存本傳。余猶及見燈花婆婆數種、極
刻其書、削去致語、獨存本傳。

相傳燈花婆婆等事、既

其蒜酪。

不可復見、

まず、「水滸傳敍」と『書影』については、ここにあげ
た部分では兩者はほとんど同文に近いが、『水滸傳敍』に
は『書影』にはない「以爲之艷」の一語がある。「艷」は

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

ここではいわゆる「まくら」のことと思われるが、元來こ
れは演劇のプロローグまたは前狂言を意味する用語として
宋元期に用いられていたもので、清代に一般的に知られて
いた語とはいいにくい。文字表記からでは意味を取りがた
いこの語を、清代の捏造者が何の必然性もなく附け加える
理由は見出しがたい。『書影』では建陽の坊刻本を批判す
るための導入として『水滸傳』のことが述べられているの
であるが、郭武定による「致語」の削除と、建陽における
省略本の刊行の關聯は、この文面からではよくわからない。
一方「發凡」では、百二十回本が原型であると主張する
ためにこのことが述べられる。ここでは、郭武定は致語を
削ったのではなく、本來あつた二十回を削り、遼國の物語
をかわりに追加したとされる。実際には百二十回本が原型
だつた可能性はない以上、これは事實とは異なるはずであ
る。二十回追加前のテキストに遼國の物語がある以上、二
十回を削つたかわりに郭武定がこれを追加したというのも
ありえないことである。郭武定本以降のテキストと考えら
れる容與堂本において閻婆の位置が動かされていない以上、

郭武定が移動させたとも考えにくい。いずれも百二十回本が原本に近く、閻婆については改良されていることをいうための創作であろう。従って、話の文脈自體が「水滸傳敍」とは異なる。これを踏まえて「水滸傳敍」が作られるということは考えにくい。また、「發凡」の「致語」に関する記述は、「致語」が「まくら」であることを前提としているが、これは口上の類を指すとする通常の「致語」の定義とは異なる。¹⁷これは「發凡」が「致語」を「まくら」であるとする文献に基づいて省略を加えた結果である可能性が高い。依據した文献が「水滸傳敍」だったと考えると、理解は容易になる。

そして、これらと同じ内容のことを述べている文があと二つ存在する。一つは、梁維樞の『玉劍尊聞』巻六「品藻」に見える。¹⁸「李贄常云、宇宙内有五大部文章（李卓吾は常に言っていた。天下には五つの素晴らしい文章がある）」としてあげる五部の中、「元有施耐菴水滸傳（元には施耐庵の『水滸傳』がある）」の注釋部分である。

故老傳聞、洪武初、越人羅氏爲此書共一百回。各以

妖異之語引於其首。嘉靖時郭武定重刻其書、削去致語、獨存本傳。

「談詭多智」「以爲之艷」がないだけで、あとは「水滸傳敍」と全く同文である。『玉劍尊聞』の刊行年は明らかではないが、梁維樞の「引」に順治甲午（十一年（一六五四））、吳偉業の序に順治乙未（十二年（一六五五））、錢謙益の序に順治丁酉（十四年（一六五七））の日付があり、『書影』は順治十六年（一六五六）から翌年にかけて周亮工が投獄されていた時に書かれたものと伝えられる。従って、『書影』以前にこの文章が存在したことは明らかである。ただし、『書影』の記述が『玉劍尊聞』に依據し、「水滸傳敍」が『玉劍尊聞』もしくは『書影』に依據するということが全くありえないとはいえない（梁維樞と周亮工は、ともに清朝宮廷において貳臣グループに屬していた）。ただ、『玉劍尊聞』においても「談詭多智」「以爲之艷」がないことは同じであり、やはりこれらの語を捏造者が付け加える必然性は感じられない。また、『玉劍尊聞』のこの部分は本文ではなく注釋であり、獨自に書いた文というよりは他から

の引用である可能性の方が高いであろう。

もう一つは錢希言『戲瑕』巻一「水滸傳」の次のくだりである。¹⁹⁾

詞話每本頭上有請客一段、權做箇得勝利市頭廻。

……微獨雜說爲然、卽水滸傳一部、逐迴有之、全學史記體。……今坊間刻本、是郭武定刪後書矣。郭故附注

大僚、其於詞家風馬、故奇文悉被剝雜、眞施氏之罪人也。而世眼迷離、漫云搜求武定善本、殊可絕倒。胡元瑞云、二十年前所見水滸傳本、尙極足尋味。今爲閩中坊賈刊落、遂幾不堪覆瓿。更數十年無原本印證、此書將永廢矣。然則元瑞猶及見之。徵余所聞、罪似不在閩賈。

詞話（語り物）は各本の最初に客寄せの一段がついており、「權かりに得勝利市の頭はじめ回となす」（三言などのもままくらの部分に見える決まり文句）ものである。……これは短篇のものに限らない。『水滸傳』は、各回にこれがあり、『史記』のスタイルを學んでいる。……今の書坊の刊本は、郭武定が削除を加えた後の書である。

『水滸傳』石渠閣補刻本文の研究（小松）

郭は元來大物軍人であつて、詩詞とは無縁であつた。

それゆえにすぐれた文はことごとく削除されてしまつた。まことに施耐庵の罪人である。だが世の人は見る眼がなく、武定の善本を探し求めるなどいい加減なことを言っているのだから、全くのお笑い草である。

胡元瑞（應麟）はこう言っている。「二十年前に見た『水滸傳』のテキストは、まだ大變味のあるものであつた。今では建陽の書坊に削除されて、甕の蓋にする價值もないようなものになつてしまつている。更に數十年たつて、確認できる原本がなくなれば、この書は永遠にだめになつてしまふであらう」。してみると元瑞はまだ見ることができたのである。私が聞いたところからすると、罪は建陽の書坊にあるというわけでもなさそうだ。

『戲瑕』の序には「萬曆癸丑」、卽ち萬曆四十一年（一六一三）の日付がある。つまり、『玉劍尊聞』『書影』よりはるかに早い時期、おそらくは「發凡」にも先だつて書かれたものである。言い回しこそ異なるが、ここで述べられ

ている内容はほとんど『書影』と合致する。そして「水滸傳諸本考」で論じたように、²⁰ここで胡應麟（二五五）一六〇二が明らかに建陽で刊行された簡本について述べた一文を郭武定本のことと誤解している点から考えて、錢希言が郭武定本を見たことがないことは明らかである。すると、この記述が何に依據しているのが問題になる。

錢希言が依據したのは「水滸傳敍」だったのではないか。そして、周亮工が建陽本を批判するためになぜか郭武定本を持ち出すという一見不可解な敘述を行っていることは、周氏が錢希言の記述を参照しているとすれば説明可能になる。『三國志演義』の李卓吾批評を書いたのが葉晝であるという記事が『戲瑕』卷三「贗籍」と『書影』卷一の雙方に見えることから考えても、周亮工が『戲瑕』を見ている可能性は高そうである。假に直接見ていなくても、こうした評判が出版関係者の間で立っていたとすれば、周亮工がそれに影響を受けた可能性は十分にあるものと思われる。逆にいうと、「發凡」も『玉劍尊聞』『書影』もまだ存在しない状態で、錢希言がこのような記述をなした理由とし

ては、現存する文獻の限りにおいては、彼が「水滸傳敍」を参照したことに由来する以外の可能性は想定しにくいのである。

すると、郭武定本で行われた改變に關する「水滸傳敍」の記述についても、改めて見直す必要が生じてくる。この「致語」について、筆者を含む過去の研究の多くは、各回の最初にすべて「まくら」が附いていたとは常識的にいつて考えにくいことから、容與堂本系統の刊本と簡本に見える各回の初めにある詩詞（本誌收録の孫論文にいう「開詞」。簡本では簡略化の關係上、一部削除されたり、眉批に回されたりしていることがある）のことではないかと考えてきた。これらの詩詞は、無窮會藏本以下の諸本では削除されているため、詩詞即ち「致語」と考え、「燈花婆婆」のような物語や「妖異語」とするのは、「發凡」や周亮工が郭武定本原本を見ていなかったことに由来する誤解であろうと見なしてきたのである。²¹しかし、これが天都外臣の手になる「水滸傳敍」に見える言葉であるとすれば、この點についても考え直さねばならない。郭武定本以前の「水滸傳」と確實

にいえるものが存在しない以上、それがどのような形態を取っていたかについては知る由もない。そして、郭武定本以降のものと考えられる容與堂本系統の刊本に回頭の詩詞が存在すること、更にいえば、郭武定が「致語」を削除したと述べる天都外臣の序を冠した石渠閣本にも回頭の詩詞があるという事実から見て、「致語」が回頭の詩詞であるとは考えにくくなる。従来「まくら」としての「致語」の存在を否定してきたことについては、そのようなことはありそうもないという以外の根拠は存在しなかった。郭武定以前の『水滸傳』には實際に「まくら」が存在し、それを郭武定が削除したのではないか。

高島氏は、「水滸傳敍」は郭武定本を非難攻撃しているから、郭武定本に基づく天都外臣序本の序文とは考えられないとするが、この点についても異なった考え方が可能である。「水滸傳敍」が述べるのは郭武定が「削去致語、獨存本傳」ということであって、「致語」が失われたことは残念だとするものの、郭武定本の「本傳」を否定しているわけではない。「乃求本傳善本校之、一從其舊以付梓」と

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

いうその「本傳」が郭武定本もしくはそれを受け継ぐ本であっても、文脈上大きな問題はないのか。政治的理由から郭武定本が危険視されていた形跡がある以上、ここでその名を明確に出していないことにも不思議はない。むしろ「本傳」という語を郭武定本とこのテキストの底本の雙方に用いることによつて、両者が同一であることを暗示しているとも見ることも可能である。そして「水滸傳敍」の筆者は、ごく一部の「致語」だけを「余猶及見」という以上、完全なテキストについては郭武定本以後の本しか見ていないことになる。その「致語」に關する説明については當然信頼性が薄く、毎回についていたとは限るまい。

では、石渠閣本の體裁は、沈徳符のいう天都外臣序本と合致するのであろうか。どう考えても新安、つまり徽州刊本とは考えがたい場合、やはり「水滸傳敍」は信頼しがたいことになる。次にこの點を検討してみよう。

さきに述べたように、石渠閣本の一部の回頭には「李卓吾評閱」と彫り込まれているのだが、中には一切批評・圈點の類は存在しない。初めの十回に集中している點から考

えても、これは後に商品價値を増そうとして行つた羊頭狗肉の改變であり、非常に惡質な行爲とすべきではあるが、もとよりそれは後にこの本を印行した書坊の仕業であつて、石渠閣本自體の價値とは無關係なことである。字體は趙體であつて、容與堂本のようないわゆる明朝體（仿宋體）ではない。例外は多いが、白話小説版本においては趙體の方が明朝體より先行するのが普通である。従つて、字體のみ見れば石渠閣本は容與堂本に先行するよう思われる。その點からも、石渠閣本の挿繪は後補の可能性が高く、逆いふと石渠閣本に元來挿繪があつたかは疑問になる。

このように、批評・注釋・圈點などを一切持たず、挿繪もない白話文學のテキストは、異例といふべきものであるが、他に例がないわけではない。『清平山堂話本』などのいわゆる『六十家小説』、そして雜劇の古名家本がこれに當たる。『六十家小説』を刊行した洪楗の清平山堂は、『六臣註文選』『唐詩紀事』など士大夫向けの書籍を刊行しており、前者には「明太子詹事府主簿洪楗校」とあること²²から考へて、刊行者洪楗自身が士大夫社會の一員であつたら

しく思われる。また、倭寇對策の責任者として浙江で大きな權力を持ち、茅坤・徐渭・田汝成ら文人たちを幕下に置いて、文武が融合する幕府を形成していた胡宗憲に對して、洪楗は娘を妾として差し出すという形で特殊な關係を結んでいたこと²³が分かつている。この點から考へて、『六十家小説』の讀者には、徐渭・田汝成のような白話文學に通じた文人と高級武官を多く含む胡宗憲周邊の人々が想定されていた可能性が高いものと推定される。

一方、雜劇古名家本は「新安徐氏」の刊行である。新安とは徽州のことであり、當時徽州はいわゆる新安商人の本據地として、多くの富豪を擁し、またその中から萬曆年間の内閣大學士許國をはじめとする政治家や文人・學者を生み出していた。この地においては、自作の戯曲を含む多數の美本を刊行した汪廷訥の環翠堂に代表される、文人趣味を氣取る新安商人による豪華本の出版が盛んであつた。古名家本は、そうした環境にあつて、復古派による「漢文唐詩宋詞元曲」鼓吹の影響を受けた元雜劇刊行の流れの中²⁴で、つまり知識人の讀者を想定して刊行された書籍であつ

た。

つまり、『六十家小説』と雑劇古名家本は、知識人もしくはそれを氣取る人々を主たる讀者として刊行されたものと思われる。挿繪は、圖解を必要とするものを別にすれば、文字だけでは書籍を受容できない文化水準の低い人々のために附けられるという意識が洋の東西を問わず存在する。

また、知識人のための書籍には句讀點を附さないのが原則、というより句讀點自體が書物を読み慣れない讀者のために出版の大衆化以降發生したものである。批評も元來は書物の内容を十分に理解できない讀者に読みどころを指示するために現れたものであろう。つまり、歴とした知識人が讀むための、刊行者が高級と自認する書物には、挿繪・句讀點・圈點・批評などは附されないのが一般的である。

このように考えると、挿繪も句讀點・圈點も批評もない石渠閣本のスタイルは、知識人向けの刊行物と合致していることがわかる。そして、端正な趙體の字體は古名家本のそれとよく似ている。これらの諸點から考えると、石渠閣本は、古名家本同様、知識人を氣取りつつ、白話文學への

興味を強く持つ人々を対象に刊行された徽州の刊行物と酷似しているように思われるのである。そして、天都外臣序本が新安で刊行されたとあること、字體から見て刊行時期が容與堂本に先立つ時期、つまり萬曆前半かと思われる點からすると、この本自體が天都外臣序本である可能性は十分にあるものと思われる。

以上の諸點から考えて、補刻を受ける前の石渠閣本のオリジナルがいわゆる「天都外臣序本」そのもの、もしくはその覆刻である可能性はかなり高いものと思われる。しかし一方で、高島氏が想定した序の捏造の可能性を完全に否定することもできない。もし序が捏造であるとすれば、この本は「天都外臣序本」ではありえないのか。體裁が「天都外臣序本」にふさわしいものであることはどのように説明されるのか。

これは全くの憶測になるが、元來「天都外臣序本」だったとすれば、清代前期の段階で序が失われていたとしても、この本が天都外臣序本であると伝えられていた可能性は高い。そこで實態を合わせ、附加價值を附けるために、新し

く天都外臣の序を捏造して巻頭に加えたということは考えられるであろう。

以上、序と體裁からこの刊本が容與堂本に先行する可能性、そしてこの本のオリジナルが古來問題になってきた「天都外臣序本」そのもの、もしくはその覆刻本である可能性について論じてきた。しかし、外形のみの議論では確實なことをいうことはできない。ここで必要なのは、石渠閣本の本文を精査し、一連の『水滸傳』版本の中に位置づけることである。

三 石渠閣補刻本の補刻部分

この問題について論じる前に、まず石渠閣本の補刻部分の信頼性について考察しておかねばならない。前述の通り、馬幼垣氏は補刻部分が多いことでこの版本を無價値であると斷定し、荒木達雄氏は原本のみに依據して補刻がなされた可能性が高いとする。どちらが正しいのか。

まず、先に例外的な事例の存在を確認しておこう。高島俊男氏は、排印本『水滸全傳』第八十八回の校記を取り上

げて、「これは、重要な、綱領的な記載で、それがここに至つてやつと出てくるというのはまったく不審である。ともかく、ここにいたつてやつと、萬曆原版には周邊に烏絲欄があり、石渠閣の補刊葉にもそれがあるが、補刊題識のない補刊葉にはそれがないうえ字體も全然違うことがわかる」とし、馬幼垣氏は、「所以說那些不加題識的整葉補刊是最後纔弄的、因爲此等葉數有些出現素質不如加題識者的現象。卷八十八最後兩葉就是特別值得一提的例子。這兩張不加題識的補刊葉子較其他葉子版框明顯小得多、連字體亦異（これらの題識〔版心の「石渠閣補」などのこと〕を加えない全葉補刊が最後になされたものであるというのは、これらの葉には題識があるものに質が劣るといふ現象が認められるものがあるからである。卷八十八の最後の二葉は特筆に値する例である。この二枚の題識のない補刊葉は、その他の葉に比べて版型が明らかにはるかに小さく、字體まで異なるのである）」とする。

實はこの二葉は、すでに氏岡論文が指摘し、更に上原・荒木論文で述べられているように、石渠閣本で唯一、原刻本が失われたためか、百二十回本のいずれかに基づいて新

たに作られた補刊葉と思われる。従って、補刊題識のない補刊葉には烏絲欄がなく、字體も全然違うことがわかるといふ高島氏の認識は誤りであるが、これは校記がこの葉が特殊であると明記しなかったため、原本を閲覽していないこの時の高島氏には分かるはずもないことであつて、やむを得ないものと思われる。一方、馬氏がこれをもつて題識のない補刊葉の代表とするのは、やはり問題のある書き方といわざるをえない。

上原・荒木論文で述べられているように、補刊葉については、版心に「石渠／閣補」とあるものが二百三十七葉、「康熙五年／石渠閣補」とあるものが、これが削られたものと思われる二葉を含めて十七葉ある。この他、版木に部分的補修が施されたものもあり、また版心に何も書かれていないが補刊葉ではないかと思われるものもある（詳細は上原・荒木兩氏の論文を参照されたい）。ただし、後二者については確定しがたい點もある。

ここでは、判断が分かれる可能性のあるものは排除して、壓倒的多數を占める「石渠閣補」と明記されている葉につ

『水滸傳』石渠閣補刻本文の研究（小松）

いて考えてみよう。これらの葉がどの程度に原本に忠實であるかが石渠閣本の價値を決定する重要な要素になるはずである。

この問題については、氏岡論文が嘉靖本・容與堂本の本文比較により、兩本との異同狀況について原刻部分と補刻部分に大きな差が認められないこと、古い本文を持つものと考えられる嘉靖本と補刻部分の本文がしばしば一致することを中心にして、補刻部分に一定の信頼性があることを論じている。氏岡論文の主旨は十分に説得力のあるものであるが、ここでは石渠閣本内部の狀況という異なつた方面から補刻部分の信頼性について考えてみたい。

まず、本文の正確さについて検討しよう。『三國志演義』などに比較して、『水滸傳』諸版本には誤字・脱字は少なく、同じ單語が近接して現れた時に、間の文章を飛ばしてしまふいわゆる「同詞脱文」も、『三國志演義』ではさまざまテキストにおいて多數認められるのとは對照的に、各版本ともほとんどその事例がない。とはいへ、誤りが皆無であるわけではなく、善本として知られる中國國家

圖書館所藏の容與堂本（北京本）にも一定量の誤字・脱字が認められる。北京本と同版であるはずの内閣本に、北京本との異同が多く認められるのは、そうした誤りを修正したことに由来するものである（ただし、明らかな誤字の修正よりも、文章表現の改善を意圖した改變の方が多い）。その結果、内閣本にはあちこちに一格に二字、二格に四字といった形で無理な改變を加えた形跡が認められることになっている。無窮會藏本は『水滸傳』諸本の中では比較的誤字が多い方であり、百二十回本も稀に誤字がある。

これに對して石渠閣本は、補刻部分も含めてほとんど誤字がない。これは、原本が入念な校正を経たテキストであったことを示すものであるとともに、補刻部分については、原本に極めて忠實な、つまり原本に直接依據した可能性が非常に高いものであることを意味する。

次に、客觀的な指標として字數の問題を取り上げよう。もし本文に異同があれば、必ず字數にずれが生じる。従つて、補刻葉がもし原刻に基づかず、他の版本に依據する、もしくは他の版本を參考にして補刻者が本文を作り上げる

といった手法を取つていたとすれば、必ず補刻葉と原刻葉の境目で文章が續かなくなるはずである。ところが、石渠閣本にはそのようなずれは一切認められない。石渠閣本の中で、内閣本に多く見られるような一格二字になっているのは、康熙五年補刻葉である第三十七回第十一葉b（以下「11b」という形で示す）に「譚名」を一格に入れて一例のみである。つまりこの點でも、補刻葉と原刻葉の間で字數調整を要した形跡は認められないことになる。

次に、字體については、補刻葉は明らかに原刻とは異なるものの、明朝體（仿宋體）ではなく趙體であり、かなり字體の異なる康熙五年補刻葉については斷言できないものの、少なくとも版心に「石渠閣補」とある部分については、できるだけ原刻に似せようとする意圖が認められる。更に、一部の文字に見られる特殊な字體も、原刻部分と補刻部分で共通しているのである。

「願」については、原刻本では「頤」という字體を用いる例が多く、時に「願」「愿」も使用されるという状況にある。例えば第四回の原刻部分である5bでは「頤」（5

bにはもう一例あるが、ここは文字が見えないため手書きで「願」とある）である一方で、第五回1bと4a（二例）は「願」、第七回2aは「愿」となっている。これに對し、補刻葉である第四回4bは「願」と「愿」、17bは「願」、第七回4aは「愿」と「願」である。つまり、「願」という特徴的な字體を用いることが共通するのみならず、三種の字體を混在させている点も一致しているのである。この他、「幾」を「幾」、「遭」を「遭」、「辭」を「辭」と表記するのは、原刻部分と補刻部分に共通して認められる用字法である。これらも補刻が原刻に字體まで忠實に従おうとしたことを示唆するものといつてよい。

また石渠閣本は、容與堂本と同様、名詞の後について場所を示す「E」については「裡」「裡」「裏」「里」、量詞の「a」については「箇」「個」という複数の表記を混在させ、一方で「這里」「那里」はほぼ「里」に統一している。これは、「裏」「箇」に統一する百二十回本や、「這里」「那里」は「里」、その他は「裏」と「箇」に統一する金聖歎本とは異なっており、表記法は未整理の段階にある。ただ、

全體としては複数の表記が混用されているものの、それらの表記は、各一回單位、あるいは回の前半と後半といった部位ごとにある程度共通した性格を示す。これは、一人の版下書きがまとまった部分の作業を擔當するため、その人物の用字意識が反映することに由来する可能性が高い。そして、その性格は、原刻部分であると補刻部分であるとを問わず、共通して認められるのである。「喫」と「吃」、「響」と「嚮」、「牀」と「床」、「莊」と「庄」などについても同様のことがいえる。

第四・二十一・三十八回という離れた位置にある三つの回を例に考えてみよう。次の表は、それぞれについて「[i:]」「[e:]」「[ɕi:]」の表記の出現数を集計したものである。第四回を例にとつて説明しよう。この回は全十七葉のうち補刻と明記するものが五とかなりの補刻部分を含む。更に、上原・荒木論文によれば、第十三・十四葉には「石渠閣補」の文字はないが、字形・匡郭の状況から見て補刻の疑いがあるとのことである。そこで、ここでは「石渠閣補」とある五葉と補刻の疑いのある二葉を除いた十葉を原刻葉

	4原刻 10	4補刻 5(7)	21原刻 9	21補刻 4(6)	21康熙 2	38原刻 13	38補刻 2
裡	16	3(12)	19	2(2)	4	2	0
裡	4	6(6)	18	10(16)	0	13	2
裏	0	4(6)	4	1(5)	2	25	5
箇	31	18(24)	20	8(12)	2	82	6
個	2	0(0)	12	4(10)	10	0	0
喫	0	0(0)	14	1(1)	0	8	18
吃	18	11(37)	13	0(2)	0	12	3

と見なすことにする。
「4原刻 10」とは、
第四回到原刻葉が十葉
あることを示す。補刻
葉については、「石渠
閣補」とある五葉の數
値を記し、その後
() を附して第十
三・十四葉における出
現數を加えた數値を記
す。第二十一回の第
五・六葉についても上
原・荒木論文により補
刻葉の可能性が指摘さ
れているため、同様の
措置を取つてある。第
二十一回の「康熙」は、
康熙五年補刻葉のこと

である。また「這里」「那里」はほぼ「里」に統一されて
いるため、數からは除いてある。

一見して明らかなように、三つの回の表記には異なる性
格が認められる。第四・二十一回は「裏」の使用例が少な
いのに対して、第三十八回は多く、逆に第三十八回では、
他の二回で多用されている「裡」が二例しか用いられてい
ない。一方「個」は、第二十一回原刻葉では合計十二例用
いられているのに對し、第四回は二例、第三十八回では皆
無である。また「喫」は、第二十一・三十八回では多く用
いられているのに對し、第四回では一度も使用されていな
い。つまり、三者三様の特徴を持つということになる。

そして、全く同じ傾向が補刻葉においても認められるの
である。第四回の補刻葉には「喫」の用例がなく、第二十
一回では補刻葉・康熙五年補刻葉を通じて「個」が使用さ
れ、第三十八回補刻葉では「裏」が用いられる一方で、
「裡」の例はない。

もう一つ注意されるのは、補刻葉にしばしば古い表記が
認められることである。例えば第五回 8 b (補刻葉) に

「再説魯智深正吃酒俚（さて魯智深はちようと酒を飲んでいます）」とある。この「俚」は状態・動作の持續を示す語氣助詞であり、元雜劇の古名家本などでは「里」と表記されていたものが、「E」を機能別に書き分けるため、「哩」と表記される方向に進行する。しかし、容與堂本には一部、明らかに語氣助詞であるにもかかわらず「俚」とする表記が認められ、それらの例はすべて他の版本では「哩」に改められている。これは、「里」からの書き分けが進行する過程で、一時「俚」という表記が行われていたことを示すものと思われる。²⁶つまり、「俚」は古い表記であって、後にすべて「哩」に取って代わられたことになる。その表記が補刻葉でも用いられているということは、補刻葉が原文を字體まで忠實に寫したことを物語るものである。

もう一つ同様の例をあげよう。第三十二回5a（原刻葉）に、「打得麻了動旦不得（毆られてしびれてしまひ動けない）」とある。容與堂本（北京本・内閣本）以下のテキストでは「動旦」が「動揮」となっているが、容與堂本系統でも天理本と四知館本は「動旦」である。續く11b（補刻

葉）にも、「宋江已自凍得身體麻木了、動旦不得（宋江はもう體中凍えて麻痺してしまひ、動くことができません）」とほぼ同じ例があり、やはり容與堂本（北京本・内閣本）以下のテキストでは「動旦」が「動揮」となっているが、天理本と四知館本は「動旦」である。「動旦」は「動揮」より古い表記と推定され、²⁶これは天理本がしばしば北京本より古い本文を残している事例の一つと考えられる（前述したように、四知館本は天理本の忠實な翻刻本である）。²⁷つまり、やはり補刻葉が古い表記を使用していることになる。そして、同じ回の原刻葉と補刻葉に全く同じ特徴的な表記が見られ、両者がともに天理本・四知館本とのみ一致することは、この部分の補刻が原刻に非常に忠實に行われたことを示すものである。

以上の考察により、補刻葉が原刻を忠實に再現したものであることはほぼ明らかになったといつてよいものと思われる。無論、補刻葉にミスがないわけではない。最も興味深いのは第三十七回9b（補刻葉）から10a（康熙五年補刻葉）にかけての次の事例である。

我有個兄弟，却又了得，渾身雪練也似一身白肉，沒得四五十里水面。

この「沒」は、金聖歎本以外のテキストでは「沒」となっている。これは泳ぐことを意味する語であり、「赴」と表記されていたものを、「赴水」で投身自殺を意味する文言との混亂を避けるため新たに造られた文字であったものと思われる。²⁸しかし、この文字はあまりにも見慣れないため定着しなかったらしく、他にはあまり用例がない。康熙五年補刻本が制作された頃には、すでにこの文字を知る人がいなくなっていたため、字形の類似した「沒」と判断して、このように刊刻してしまったのであろう。なお、同様の誤りはもともと早く生じていたらしく、金聖歎本も「沒」としている（ちなみに第三十八回に複数見える「沒」は、石渠閣本は原刻葉で「沒」のまま、金聖歎本はすべて「赴」に書き換えている）。

この他にも、補刻葉には稀に誤字らしきものが認められるが、それは極めて例外的であり、全體としてみると原刻

本を非常に忠實に再現したものと認められる。従って、石渠閣本の本文について考察するに当たっては、原刻か補刻かという點に注意を拂いつつも、基本的には兩者を一括して扱っても差し支えないものと判断される。

四 石渠閣補刻本の本文

本章においては、いよいよ石渠閣本本文が『水滸傳』諸版本の中でどのように位置づけられるかを考えていきたい。この點については、氏岡論文が嘉靖本との比較を中心に論を進め、石渠閣本の本文は嘉靖本と容與堂本の間にあるとの結論を得ている。この結論は基本的に正しいものと思われるが、ここでは更に全面的な考察を試みたい。なお、前章までの考察に基づき、補刻葉も原刻葉と同様に考察の対象とするが、一應の區別は必要であるという観点から、補刻葉の例については「石」の後に（補）と記すことにする。

石渠閣本の本文は、基本的には容與堂本と大差ない。一見すると同一本文の翻刻本とすら見ることが、これまで

石渠閣本の本文について真剣な検討がなされてこなかった原因の一つかと思われる。全百回からなり、各回到頭の詩詞を有するテキストは、一連の容與堂本系統のテキスト（四知館本を含む）以外には石渠閣本があるのみである。また百卷百回からなるテキストも、石渠閣本と容與堂本系統のテキストのみである。しかし、容與堂本（天理本）の忠實な覆刻である四知館本とは異なり、石渠閣本と容與堂本の間には、隨處に有意の異同が認められる。

つまり、石渠閣本と容與堂本系統の諸本とは、非常に近い關係にある別のテキストであることになる。このようなテキストは、石渠閣本しか存在しない。従来最古の完全なテキストとされてきた容與堂本を相対化しようという点だけでなく、石渠閣本の價值は非常に高いといつてよいであろう。當然ながら、そこで問題になるのは兩者の關係である。この點について考える鍵になるのが兩者の本文異同であることはいうまでもない。すでに述べたように、全體的にいつて、容與堂本（北京本）が誤っている箇所については、石渠閣本の本文が正しいという傾向が認められる。しかし、

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

正しい本文を持つことは、必ずしも原型を傳えていることを意味しない。當然のことながら、誤った本文を後出のテキストが修正することが考えられるからである。兩者の關係を決定するためには、明らかに一方が原型であることを示す事例がなければならぬ。

まず第二十一回に見られる三つの事例を検討してみよう。閻婆惜殺しのくだりである。

まず8aの例。

石・衆 道、我方纔見他和閻婆兩箇過去一路走着。

容・衆人道、我方纔見他和閻婆兩箇過去一路走着。

石渠閣本では「衆道」である部分が、容與堂本では「衆人道」となっており、無窮會藏本・芥子園本・一連の百二十回本・金聖歎本（以下これらをまとめて「無窮會藏本以下」と略稱する）も「衆人道」である。これだけ見ると、石渠閣本が誤つて「人」を脱落させたように見えるが、事情はそれほど單純ではない。

容與堂本（北京本・内閣本。天理本はこの部分を缺く）では、「衆人道」は二字分のスペースに無理矢理詰め込まれているのである（以下不自然な字配りの部分には傍線を附す）。これは、北京本は容與堂本最初の印本ではなく、最初の版本（以下「原刻本」と呼ぶ）に修正を加えたものであることを意味する。原刻本では、この部分には二字しかなく、再印に当たってそれでは不自然だと判断した刊行者が、修正を加えて無理に三文字にした結果が現在の北京本の姿と考えられる。そして四知館本は、石渠閣本と同じく「衆道」である。四知館本が天理本の忠實な翻刻である点からすると、今は缺葉となっているため確認できないものの、天理本も「衆道」となっていた可能性が高いものと推定される。そして前述のように、天理本はしばしば北京本より古い、つまり原刻本の本文を傳えている。すると、原刻本は「衆道」であったが、それでは意味をなさないと考えた北京本（原刻本と北京本の間で更に修正があった可能性も想定される。この修正がその段階で加えられた可能性は、後述のようになかなか高いものと思われる）の印行者が修正を加え、「衆道」を

「衆人道」に修正したが、同一の版本を使用しているため、二字分に三文字詰め込まねばならなくなったものと推定される。そして、無窮會藏本以下は、この修正を経たテキストに據っていることになる。

以上の諸點から考えて、石渠閣本の本文は、北京本より古い、容與堂本の原刻本と同一の本文を持っているものと判断される。そして、續く9aにも同様の事例が認められるのである。

石：却把兩扇門關上拏控了、口裡只顧罵。

容：却把兩扇門關上拏控控了、口裡只顧罵。

ここでも、無窮會藏本以下は「拏控控了」と容與堂本に合致する。しかし、容與堂本（北京本・内閣本。天理本はこの部分を缺く）は「控了口裡」を三字分に詰め込んでいる。そして、四知館本は「拏控了」と石渠閣本と同じ本文を持つ。ここでも、四知館本は原刻本の本文を傳えており、「拏控了」では「かんぬきを持ってかんぬきを掛ける」と

はならないと考えた人物が「拴」を付け加えたと見るべきであろう。そして、石渠閣本の本文は原刻本と一致している。

更に15a（補刻葉）には次のような例がある（この例は氏岡論文でも言及されている）。

石（補）…宋江聽了公廳兩字、怒氣起、那里按納得住。
容 …宋江聽了公廳兩字、怒氣直起、那里按納得住。

下線を附した「直起」の二字は、原本では小さい字で一格に横に並列されている。

無窮會藏本以下はすべて「直起」であるが、容與堂本系統の内部では、天理本が「怒氣起」、内閣本が「怒氣直冲起來」と、傍線部については一格に四字を詰め込んでいる（四知館本は缺）。ここでも、天理本が原刻本の本文を伝え、石渠閣本はそれと一致していることになる。なお、これは補刻葉であつても古い本文を傳えている事例でもある。

以上の事例は、いずれも第二十一回のものであり、局地

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

的な現象である可能性もある。しかし、同様の例は他の部分にも認められるのである。

まず第二十四回20aにおける逆パターンの事例をあげよう。西門慶が王婆を賞賛する言葉である。

石…然雖道上不得凌烟閣、端的好計。
容…雖然 上不得凌煙閣、端的好計。

無窮會藏本以下も「雖然上不得」である。しかし、容與堂本（北京本・内閣本）は、「雖然」の二文字が不自然に大きく、三文字分を占めている。そして、容與堂本系統でも天理本・四知館本は「然雖道上不得」である。つまり、こゝでも天理本・四知館本が原型であり、前の事例とは逆に、「然雖道」が不自然であると考えた人物が、この三字を削つて「雖然」の二文字を入れた結果、不自然な字配りになったものと思われる。そして、石渠閣本は天理本・四知館本と合致している。

續いて第二十六回4bの例をあげよう。武松が兄の靈前

に行く場面である。

石…叫土兵打了一條麻縑繫在 身邊藏了一把尖長柄短背

容…叫土兵打了一條麻縑繫在腰裡身邊藏了一把尖長柄短背

厚刃薄的解腕刀。

厚刃薄的解腕刀。

無窮會藏本以下も「在腰裏身邊」と、表記こそ異なるものの、容與堂本と同じ本文を持つが、容與堂本（北京本・内閣本）は「腰裡身邊」の四字を二文字分に詰め込んでいる。そして、天理本・四知館本は、「在身邊」となっており、やはり天理本が原刻本の本文を傳えているものと思われる。これは、「身邊」が「麻縑」を掛ける場所と「解腕刀」を隠す場所を兼用するのは不自然と判断した人物が「腰裡」を追加したものと考えられる。ここでも石渠閣本は天理本・四知館本と合致している。

次に、不自然な字配りが見られるもの以外の事例をあげ

よう。第二十八回6b、牢に入れられた囚人のことを述べる場面である。

石…大鐵鏈鎖着也要過里。

容…大鐵鏈鎖着也要過哩。

語氣助詞「ㄟ」が「里」と記されるのは、前述したように古い表記であり、「ㄟ」の表記は全體に「里」から「哩」に移行する傾向にある。容與堂本（北京本・内閣本）は「哩」、無窮會藏本以下も「哩」であるが、容與堂本系統でも天理本と四知館本は「里」である。おそらく容與堂原刻本は「里」であり、他の「ㄟ」と區別する必要を感じた人物がそれを「哩」に書き換えたのであろう。そして、石渠閣本も「里」となっており、天理本・四知館本と合致している。ここでは石渠閣本は、おそらく容與堂原刻本で使用されていたのと同じ古い表記を使用していることになる。

後半になると、天理本・四知館本が独自の本文を持つこ

とが少なくなるため、こうした事例を指摘することは難しくなるが、とりあえず第二十一回の局地的な現象ではないことは明らかである。

以上の事例から、石渠閣本が少なくとも容與堂本の北京本より古い本文を傳えていることは明らかになったといつてよい。では、石渠閣本は容與堂本の原刻本に基づいているのであろうか。

第十二回9aの事例を見よう。北京で調練が始まる場面である。

石(補)…三五十對金鼓手、一 發起搦來。
容 …三五十對金鼓手、一齊發起搦來。

ここでは、天理本・四知館本も含めて、容與堂本系統の諸本はすべて同じ本文を持つ。ただ、北京本・内閣本・天理本は、いずれも「一齊」を一格に二字並列で入れている。そして、石渠閣本はその二字分が「一」一文字になっているのである。「一發起搦來」でも特に問題はないのだが、

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究(小松)

おそらくこの後で太鼓を打つことを意味する動詞として「發」を使用していることから、表現に整合性を持たせようとして改めたものであろう。これは、天理本・四知館本より古い本文を石渠閣本が持っていることを示す事例であるとともに、補刻葉であつても古い本文を維持していることを示すものでもある。

もう一つ、第二十三回4aの同様の事例をあげよう。武松が虎殺しの前に酒を飲む場面である。

石…只見店主人把三 碗一雙筋一碟熱菜放在武松面前。
容…只見店主人把三隻碗一雙筋一碟熱菜放在武松面前。

ここでも、「三碗」とするのは石渠閣本のみであり、他本は天理本・四知館本も含めてすべて「三隻碗」であるが、容與堂本系統の諸本(四知館本を含む)は「三隻」を一畫に二字並列で入れている。つまり、原型は「三碗」であつたが、後に續くともに量詞を伴う「一雙筋」「一碟熱菜」と不釣り合いと考えた人物が、量詞「隻」を追加したのであ

ろう。これは、石渠閣本のみが古い本文を残している事例ということになる。

以上のように、石渠閣本は明らかに現存する容與堂本より古い本文を持っている。しかし、容與堂系統の諸本に修正の形跡が認められるということは、石渠閣本の方が現存する容與堂系統の諸本より古い本文を持つことを示す一方で、それが容與堂原刻本と同一の本文である可能性が高いことをも意味する。石渠閣本が容與堂原刻本より古い本文を持つ可能性はないのであろうか。

ここで注目されるのが、第十三回2aに見える次の事例である。北京で楊志が周謹に勝ったのを見た梁中書が、周謹の地位を楊志に與えようする場面である。

石：前官前官你你做做箇箇軍中副牌。軍中副牌量你這般武藝、如何南征北討、容：前官前官你你做做箇箇軍中副牌。

怎生做的正請受的副牌。教楊志替此人職役。

教楊志替此人職役。

「前任者がおまえを軍中副牌にしたが、この者の職を楊志に交代させよ」というのはいかにも舌足らずな言い方であり、石渠閣本のように、「おまえのこんな武藝如きで、あちこちに遠征などできようか。正職の副牌などできるものか」が間にあつてはじめて理解が可能になる。これは、容與堂本が波線を附した二つの「副牌」の間を飛ばしてしまった、いわゆる同詞脱文の結果であろう。前述したように、同詞脱文の事例は『三國志演義』諸版本には多數認められるが、『水滸傳』ではほとんど例を見ない。しかしこれは、同詞脱文に由来するものと見なければ説明不可能である。

容與堂原刻本にこの長い脱落部分が存在したとすれば、この後の行款が全面的にずれてくる以上、この脱落は原刻本段階ですでに生じていたと考えざるをえない。つまり、石渠閣本が容與堂原刻本と同一の本文を持つていたことはありえないのである。そして、脱文前の古い本文を持つている以上、石渠閣本が容與堂本に先行する内容の本文を傳えていることに疑問の餘地はない。

もう一つ、この部分の異同からは興味深い事實を導き出すことができる。この部分で、無窮會藏本以下の諸本は、すべて石渠閣本と同一の本文を持っているのである。石渠閣本は、容與堂本と石渠閣本のみに見られ、無窮會藏本以下の諸本には存在しない本文を多数持っている以上、石渠閣本が無窮會本以下の諸本のいずれかに依據していることは考えられない。とすれば、これら諸本は容與堂本ではなく、石渠閣本と同文のテキストに依據していることになる。これらの諸本が容與堂本に依據していないものと思われることは、すでに論じた通りではあるが、ここでそれが決定的に實證されるとともに、依據したテキストは石渠閣本に近いものであったことも明らかになったことになる。従来は、筆者自身をも含めて、容與堂本の價值を絶対視したために、こうした異同については後の版本が改變を加えた結果と考えがちであった。石渠閣本の存在は、そうした先入観を根本から覆すものである。ただし、この一箇所のみでは、局地的な現象である可能性も否定しきることはできない。この点については、次章で再検討することとしたい。

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

石渠閣本が容與堂原刻本より古い本文を傳えているとすれば、いわゆる嘉靖本との關係が問題になる。嘉靖本については、『水滸傳』諸本考」において詳しく論じたので、ここで繰り返すことはしないが、中國國家圖書館に第四十七～四十九回と第五十一～五十五回のみが現存する殘本であり、馬幼垣氏は萬曆中期以降の「垃圾本（ゴミ本）」とするが、本文を精査すれば、佐藤晴彦氏や荒木達雄氏が論じ、更に筆者も述べたように、容與堂本に先行する本文を持つことは明らかであり、字體や版本の形態から見ても、確實とはいえないが、嘉靖頃の刊である可能性が高いものと思われるテキストである。従って、石渠閣本の本文の位置づけを行うためには、嘉靖本との關係を明らかにすることは不可欠である。ただし、石渠閣本と嘉靖本の關係については、氏岡論文がすでに詳細に論じ、また荒木達雄氏がすでに石渠閣本は嘉靖本と容與堂本の間にあたる本文を持つ旨述べ、近いうちに專論を發表することであるため、^③ここでは幾つかの事例をあげて、石渠閣本について考えるにとどめたい。

まず第四十八回1bの事例を検討しよう。祝家莊の戦いの場面である。氏岡論文でもあげられている事例である。

石…鹿角都搽了路口。

嘉…鹿角都搽了路口。

容…鹿角都搽了路口。

無窮會藏本以下はすべて「塞了路口」であり、天理本・四知館本も同じである。

「搽」は通常はお白粉などを塗ることを意味し、このままでは意味を取りがたいが、おそらく道をふさぐことを意味する「叉」について、古くこの表記が用いられていたであろう。この表記では意味を取りにくいいため、容與堂本以下では「塞」となっているものと思われる。當然ながら、「塞」をわざわざ「搽」に書き換えることは考えられない。つまり、嘉靖本はやはり古い本文を持つのであり、石渠閣本はこれと一致している。

續いて第四十九回12aの例。樂和が解珍・解寶に食事を届けるところである。これも氏岡論文でもあげられている

事例である。

石…把與他兩箇解珍解寶們道

嘉…把與他兩箇解珍解寶們道

容…把與他兩箇解珍解寶們道

無窮會藏本以下は、表記こそ異なるが、本文自体は容與堂本と同じである。この後に来るセリフは樂和のものであり、したがって「問」でなければおかしいはずであるが、嘉靖本と石渠閣本はともに「們」とする。これは誤りの繼承であり、両者が同文のテキストに依據していることを意味する。

次に第五十四回10aの例をあげよう。井戸の底から柴進を救出した場面である。

石…宋江見柴進頭破額裂、

嘉…宋江見柴進頭破額裂、

容…宋江見柴進頭破額裂、

無窮會藏本以下は容與堂本と同じである。「烈」は明らかに「裂」の誤りである。ここでも、嘉靖本と石渠閣本の間で同じ誤りが繼承されている。

ただ、石渠閣本は嘉靖本と同一の本文を持つわけではなく、荒木氏の所説のように、嘉靖本と容與堂本の間にあることは、第五十五回11aの次の例からも明らかである。凌振を歸順させる場面になる。

石 …… 宋江却又陪話、再三枚舉。凌振答道、小可在此趨
嘉 …… 宋江却又陪話、再三拔舉。凌振答道、小可在此趨
容 …… 宋江却又陪話、再三枚舉。凌振答道、小可在此趨
無以下…宋江却又陪話。凌振答道、小可在此趨

時不妨。
時不妨。
侍不妨。
侍不妨。

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

石渠閣本は、「陪話」「枚舉」については嘉靖本と異なり、容與堂本と一致するが、「趨時」については、「趨」の字體の差はあるものの、嘉靖本と一致する。「趨侍」の方が普通の表記であり、ここでも嘉靖本と石渠閣本の間では問題ある標記が繼承されていることになる。

以上を総合すると、氏岡論文が述べるように、石渠閣本は、嘉靖本と同一の本文を持つテキストをもとに、若干の修正を加えたものである可能性が高いものと考えられる。すると、次には石渠閣本と他の版本との関係が問題になってくる。

五 石渠閣補刻本と他の版本の関係

石渠閣本と容與堂本以下の諸版本はどのような関係にあるのであろうか。まず、容與堂本以外の諸本について考えよう。諸本のうち、金聖歎本は百二十回本（おそらく全傳本）に、百二十回本は芥子園本系統の版本に基づく³²。従って、主として問題になるのは無窮會藏本と芥子園本系統（ここでは芥子園本により代表させる）との関係ということになる。

第十三回2aの本文異同から考えて、無窮會藏本以下の諸本は、容與堂本ではなく、石渠閣本と同じ本文に依據しているものと思われると先に述べたが、他の箇所についても同様のことがいえるであろうか。まず、先にあげた第四十九回12aの用例のすぐ前にある一文をあげてみよう。

石…包節級正在亭心 着看見便喝道

嘉…包節級正在亭心 着看見便喝道

容…包節級正在亭心 着看見便喝道

無…包節級正在亭心 着看見便喝道

芥…包節級正在亭心裏 看見便喝道

嘉靖本と石渠閣本は「正在亭心着」と同じ本文を持つが、これでは意味がわからない。容與堂本は「正在亭心坐着」となっており、これなら理解しやすいが、よく見ると下線部は六字分に七字が詰め込まれていることがわかる。つまり、おそらく原刻本は嘉靖本・石渠閣本と同じ本文を持っており、それをできるだけ目立たない形で修正したのが現

存するテキスト（北京本・内閣本・天理本すべて同じ）ということになる。そして、無窮會藏本は嘉靖本・石渠閣本と同じの本文を持ち、芥子園本・百二十回本・金聖歎本は「着」を「裏」に改めて、自然な表現にしている。

これは、無窮會藏本以下の諸本が現存する容與堂本には基づいていないことを示す事例である。容與堂本に依據していれば、無窮會藏本のような本文が出るはずもなく、また意味的に全く問題がない以上、芥子園本以下のような書き換えをする必要もない。つまり、無窮會藏本以下の諸本は、嘉靖本・石渠閣本、もしくは容與堂原刻本に基づいているのである。

次に第五十三回14aの例を見よう。ここは補刻葉にあたる。薊州で羅真人が李逵をこらしめるため、府廳に墜落させた場面である。

石(補)…都來問道李逵你 端的是甚麼人。

嘉…都來問道李逵你 端的是甚麼人。

容…都來問道 你這箇端的是甚麼人。

無・芥…都來問 李達你 端的是甚麼人。

ここでも嘉靖本と石渠閣本は一致する。これは、補刻葉であっても古い本文を忠實に傳えている事例といつてよろう。嘉靖本・石渠閣本の本文は、「道」の後に「李達」があり、普通に讀むと「李達、おまえは一體何者だ」となるが、これがセリフとして矛盾していることはいうまでもない。しかも、薊州の役人たちは李達の名を知るはずもない以上、いよいよ不自然になる。これは、早い時期の白話文において、直接話法と間接話法が明確には區別されていなかったことのあらわれと思われる。

容與堂本はこれを合理化するため、「李達」を削除して、かわりに「這箇」を加えている。ところが、無窮會藏本以下の諸本は、「李達」を残し、「道」を削って、「李達」を「問」の目的語とすることで問題を解決しているのである。容與堂本の本文に依據していればこのような改變を必要としないのみならず、そもそも「李達」が出てくることもありえないことは明らかである。

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

ただ、これらの事例だけでは、無窮會藏本以下の諸本が依據しているのは容與堂原刻本であるという可能性も否定しきれない。しかし、實は石渠閣本と無窮會藏本以下が一致して、容與堂本とは異なる事例は多數存在するのである。たとえば第四回2b、魯達が金老父子と酒を飲む場面。

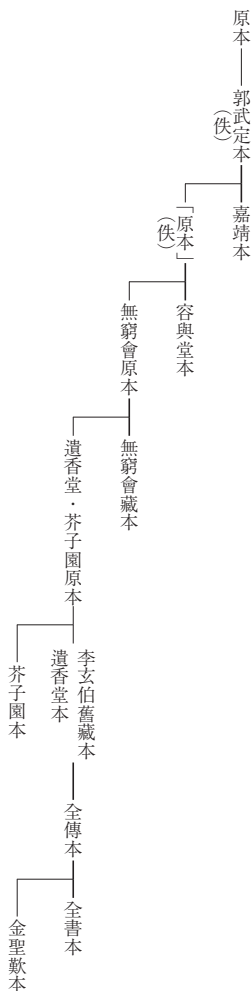
石・無・芥…三人慢慢地飲酒、將及天晚、只聽得樓下打將起來。（表記は石渠閣本に従う）

容 ……三人慢慢地飲酒、將及晚也、只聽得樓下打將起來。

容與堂本系統は、天理本・四知館本も含めて各本同じである。こうした例は枚擧に暇がない。こうした事例の大部分について、従來は筆者も含めて、容與堂本の本文を後の版本が改めたものと認識していた。しかし、實際にはむしろ容與堂本の方が誤っている、もしくは改變を加えている事例の方が多いことが、石渠閣本の調査から明らかになったのである。

では、無窮會藏本以下の諸本は補刻が施される以前の石渠閣原本（以下この語を、現存する石渠閣補刻本の補刻前のテキスト、もしくはそれと覆刻関係にあるテキストを指すものとして使用する）に依據しているのであろうか。しかし、一方ではこれらの版本に、石渠閣本とは文言を異にし、容與堂本のうち北京本・内閣本と合致する事例が幾つも存在することは、すでに見てきた通りである。そうした事例の多くにおいては、無窮會藏本以下の諸本は、おそらく容與堂原本刻本とも合致しないことになる。

この矛盾した状況が生じた原因を説明することは困難であるが、無窮會藏本・芥子園本系統諸本は、石渠閣本と同



文のテキストに基づきつつ、容與堂本のうち北京本もしくは内閣本を参照して校訂を加えたと考えれば、説明可能ではある。ただこの場合、芥子園本系統の諸本や、それをほぼ覆刻した百二十回本（新たに追加した二十回とその前後を除く）について、容與堂本を参照した形跡が認められないという事実^④と矛盾する。

ここで想起されるのが、筆者が『水滸傳』本文の研究^⑤で論じたように、無窮會藏本と芥子園本系統の諸本には共通する原本、筆者が同論文で「無窮會原本」と名付けたテキストが存在したと考えられることである。次に示す同論文に附した系統圖を参照されたい。

「無窮會原本」段階で、おそらくはやや先行して同じテキストに依據して作られた容與堂本を參考にして改變が加えられたのではないか。そして、「無窮會原本」をもとにして、無窮會藏本と芥子園本系統の原本が別々に作られたと考えれば、矛盾はほぼ解決する。

無窮會藏本以下の諸本の中では、無窮會藏本が石渠閣本と最も密接な關係を持つことは、しばしばこの兩者において「杯」「盃」、「牀」などの書き分けが一致する点からもうかがわれるが、特に第五回12bの次の例は兩者の關係が近いことを示すものである。

石…約莫走了五七十里多路。

容…約莫走了五六十里多路。

無…約莫走了五七十里多路。

芥…約莫走了五六十里多路。

石渠閣本と無窮會藏本のみが一致している。更に第四回16a、魯智深が五臺山で暴れる場面をあげよう。

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

石…叫起一班執事僧人

容…叫起一班執事僧人

無…叫起一班執事僧人

芥…叫起一班執事僧人

石渠閣本と無窮會藏本のみが「執事僧人」となっている。そして、この前後では、同一の單語をこの兩本も「職事僧人」と表記しており、この部分は誤りが繼承されていることになる。前述したように、石渠閣本は誤字の少ないテキストだが、ここは珍しく誤った部分で、その誤字が無窮會藏本と一致しているのである。

以上のような事例から見て、無窮會藏本と石渠閣本はかなり近い本文を持つものと判断される。これらの事實を踏まえれば、先の圖における郭武定本から出た「原本」の位置に當たるものが石渠閣原本だと見なすことにより、全體の狀況をほぼ合理的に説明することが可能になる。即ち、郭武定本の本文をかなり忠實に受け継いだのが嘉靖本であるのに對し、多少の修正を加えたのが石渠閣原本であり、

それに基づいて、多少のミスはあるものの、ほぼ忠實に翻刻した容與堂原本と、おそらくやや遅れて、詩詞韻文を一定量削除し、先行して刊行された容與堂本を参考にしてある程度手を加えた無窮會原本が作られた。そして、無窮會原本から詩詞韻文を更に削除したのが無窮會藏本、違うやり方で手を加え、詩詞韻文を増補したのが芥子園原本ということになるのではないか。

すると、次に問題になるのは石渠閣本と容與堂本の関係である。さきの假説に従えば、容與堂本は石渠閣原本から出ていることになる。それを論證することは可能なのか。石渠閣本と容與堂本は、本文が非常に近いのみならず、一部で用字法までが一致する。例えば第六十二回では、容與堂本は15aを境にして、それまで基本的に「箇」「裏」を使用していたものが、「個」と「裡(一部「裏」を使用)」に變化する。そして、石渠閣本も同じ箇所 で用字法が變化し、基本的に容與堂本と同じ表記を用いているのである。「響」「響」も、第六十一・二回において容與堂本は雙方を使用しており、石渠閣本のこの二字の使い分けは、容與

堂本と完全に一致している。また、容與堂本11aでは、「這里」に統一するという原則に反して「這裏」が使用されているが、石渠閣本もやはり「這里」を原則としながら、ここでは「這裏」を用いている。また、第三十三回において、容與堂本では8aで「武藝」、8bで「武藝」と近接した箇所 で二通りの表記が使用されているのだが、石渠閣本も、それぞれの位置で全く同じ表記を使用している。ちなみに四知館本も同じであり、これは四知館本が容與堂本の忠實な翻刻であることを示す好例といつてよいが、石渠閣本の場合はどうなるのか。すでに見たように、石渠閣本が容與堂本に依據していないことは明らかである。するとこの場合は、四知館本とは逆のことがいえることになる。つまり、容與堂本は石渠閣原本に直接依據している可能性が浮上してくるのである。

容與堂本において形式上問題がある箇所について検討してみると、その問題が石渠閣本と同じ版面に由来する可能性が認められる。まず容與堂本の第二十七回5bの事例である。ここには孫二娘を描寫する四六の美文が置かれてい

るのだが、前には「見那婦人如何（その女の様やいか）」とあるだけで、通常ならあるべき「但見」がない。これは無窮會藏本以下の諸本でも同様である。なぜここに限って「但見」がないのか。

そこで石渠閣本の同回5aを見ると、「見那婦人如何」がちょうど行末に位置している。もし「但見」をつけると、四六は改行して一字下げにするのが原則であるため、わずか二字のために一行が増すことになってしまう。そこで石渠閣本は、行数をかせぐために、なくても意味上問題のない「但見」を削除したのではないか。もしこの推論が正しければ、容與堂本はもとより、その他の諸本もすべてこの版式のテキストから出たことになる。

同様の例を第二十八回にも見出すことができる。武松が施恩に自分を歡待する理由を説明するよう求めるところである。容與堂本では10bにあたるこの部分の本文は以下の通りである。

石 …今番須同 説知。

『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究（小松）

容 …今番須同 説知。
無・芥…今番須用 説知。
天理 …今番須同我説知。

天理本は「同我」を二字一格としている。内閣本は不鮮明だが、おそらく天理本と同じと思われる。四知館本は北京本と合致する。ということは、おそらくここでは天理本は内閣本に依據して修正したものと思われる。

天理本が修正していることからわかるように、「今番須同説知」では意味をなさない。それゆえ無窮會藏本以下の諸本は「同」を「用」に改めて合理化したのである。これは、元來は「同我」であったものの「我」が何らかの理由で脱落した結果である可能性が高いものと思われる。脱落はなぜ生じたのか。石渠閣本9aは容與堂本と同様に當たる。このため、改行にあたり「我」を飛ばしてしまつたというのが、ミスが発生した原因の最も合理的な説明であろう。もしそうであるとすれば、やはり他のすべての

版本は、この版式のテキストから出ていることになる。

そもそも、石渠閣本の行款は、『水滸傳』本文を刊行するには最適のものである。半葉十二行、行二十四字で、頭に通常置かれる七言詩は、七言三句が上と間に一格ずつ空間を空けてきれいに収まる形になる。これに對して容與堂本は半葉十一行、行二十二字で、これでは一行に三句を収めることができず、二字がはみだすことになる。このような版式が當初から取られていたとは考えにくい（なお、無窮會藏本以下の諸本は、金聖歎本を除いてすべて容與堂本同様一行二十二字であるが、いずれも各回頭頭の詩を削除しており、篇中で詩が引かれる場合には、一行に二句のみという贅澤な配置を取っているため、こうした問題は目につかない）。

これらの諸點からすると、容與堂本は、石渠閣本と同じ本文と版式を持つテキストに依據していた可能性が高いものと判断される。つまり石渠閣原本は、從來最古最良のテキストと考えられてきた容與堂本（北京本）の更にもとになった版本であり、なおかつ嘉靖本を除く現存するすべてのテキストの源流に位置づけられるテキストだったのでは

ないかと考えられる。そして現存する二つの石渠閣補刻本は、その大部分において原本の本文を残しているのである。

六 石渠閣補刻本（平田氏藏本）の價值

以上述べてきたように、現存する二つの石渠閣補刻本は、その大部分において、殘本である嘉靖本を別にすれば、現存する中で最も古い本文を残しているものと思われる。更に上原・荒木兩氏が指摘するように、今回世に知られるようになった平田氏藏本は、中國國家圖書館藏本より刷りが早く、また中國國家圖書館藏本では補刻葉になっている第十五回第一・二葉については原刻葉を残している。つまり平田氏藏本は、より正確な本文を持つという點で、第二回までの初めの部分が缺けてはいるものの、計り知れない價値を有するといつてよい。

そこで、石渠閣本のみが独自の本文を持つ少數の箇所については、特にその重要性が際立つことになる。最も注目されるのは第十一回10b、梁山泊に入るため「投名狀」を求められた林冲が旅人を待ち伏せする場面である。容與堂

本12 aと對比してみよう（無窮會藏本以下の諸本も字形を除けば容與堂本と同じ）。傍線部は石渠閣本のみにある部分、波線部は石渠閣本にはない部分である。

石（補）…只見那個人遠遠在山坡下大步行來。林冲將身蹲
容 …只見那個人遠遠在山坡下、望見行來、

在林子樹科裏、一眼覷定、只待那人來得較近、却把朴刀

待他來得較近、林冲把朴刀

桿剪了一下。
桿剪了一下。

他のテキストには存在しない本文が、石渠閣本のみに存在することになる。問題は、元來なかつたものを石渠閣本が附け加えたのか、それとも容與堂本以下の諸本が脱落させた、もしくは削除したのかである。石渠閣本は「その男が遠く山の麓を大股にやって來るのが見えた、林冲は林の

『水滸傳』石渠閣補刻本文の研究（小松）

木の枝の中にうづくまって、しつかと見定めると、その男が近くまで來るのをじつと待ってから、朴刀の柄を揮つた」という意味であるのに對し、容與堂以下の版本は「その男が遠く山の下に見えた。やって來るのを遠くから見、近くまで來るのを待つと、林冲は朴刀の柄を揮つた」となる。「只見」は狀況描寫を導くテクニカルチームだが、ここでは同時に林冲の目から見えたという意味も含むであろう。容與堂本以下の諸本の本文では、すぐ後に「望見」があつて意味が重複する上に、一連の動作の主體が明確ではない。この部分は康熙五年の補刻葉であるが、もし他版本にない部分が補刻時に追加されたものであれば、續く原刻葉である11 aとの間で字數のずれが生じるはずである。しかし、その形跡は全くない。つまり、原刻段階の本文もこのようなものであつたと考えられる。容與堂本の本文は、先に述べたように問題のあるものではあるが、讀めないというほどではない。事實この部分について本文に問題があると考えられたことはこれまでになく、問題箇所を訂正することの多い金聖歎本もこの本文に従っている。逆にいうと、石

渠閣本がわざわざ新しい本文を附け加える必要もないのであり、實際石渠閣本全體を見渡してもそのような事例は他にない。このことと、石渠閣本が全體に容與堂本より古い本文を持っていると思われることを考え合わせると、容與堂本段階でこの本文が脱落した、もしくは書き換えられたと考えるべきではないかと思われる。原因は不明だが、石渠閣本では「坡下大步行來。林冲將身躡在林子樹科裏、一眼覷定、只待那」と、脱落している部分の大半が一行に收まつており、容與堂本の底本になったテキストでは、何らかの事情でこの行が見えなかった、もしくは脱落していた可能性が高いものと思われる。他の版本も同様の本文を持つということは、そのテキストは無窮會原本の底本でもあったのであろう。ここに、從來知られていなかった『水滸傳』の本文が、わずかながら発見されたことになる。

では、石渠閣補刻本は『水滸傳』テキストの中でどのよう^①に位置づけられるのか。もとより斷言することはできないが、嘉靖本と容與堂本の間^②に位置する本文を持つことから考えると、郭武定本に若干の修正を加えたテキスト、

つまりいわゆる天都外臣序本の本文がこれに當たる可能性はかなり高い。つまり本文からも、この補刻を施す前の石渠閣本が天都外臣序本である可能性が確認されるのである。また、もし假に天都外臣序本ではないとしても、石渠閣補刻本が容與堂本の前段階の本文を伝える、つまり郭武定本の原貌を知る手がかりとなる極めて重要なテキストであり、計り知れない價值を持つことは間違いない。

一々注記はしていないが、本論文の執筆に當つては、平田昌司・上原究一・荒木達雄の諸氏からさまざまな助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表させていただきます。

本論文は、平成三十年度科學研究費助成事業・基盤研究・課題番號一六〇二五九二「『水滸傳』本文の研究」の成果の一部である。

註

- ① 高島俊男「水滸傳『石渠閣補刻本』研究序説」（『伊藤漱平教授退官記念 中國學論集』〔汲古書院一九八六〕五五一―五八九頁）。
- ② 『吳曉鈴集』（河北教育出版社二〇〇六）第一卷に收録。
- ③ 高島氏は同論文執筆時期の一般の見解に従って楊定見本と

するが、今日ではこの呼稱はほぼ否定されている。この「發凡」は、全傳本のみならず、郁郁堂本などの全書本にも附されており、百二十回本に共通するものといつてよい。

④ 聶紺弩「水滸傳」五論 五（『中國古典小說論集』（上海古籍出版社一九八二）。「論『水滸傳』的繁本與簡本」として『中華文史論叢』一九八〇年二月に發表後改稿）。

⑤ 馬幼垣「嘉靖殘本『水滸傳』非郭武定刻本辨」（『水滸傳』三聯書店二〇〇七）所收。該當箇所は同書七十四頁）。

⑥ 荒木達雄「嘉靖本『水滸傳』と初期の『水滸傳』文繁本系統」（『日本中國學會報』第六十四集（二〇一二年十月））。

⑦ 荒木前掲論文及び小松「『水滸傳』諸本考」（『京都府立大學學術報告 人文』第六十八號（二〇一六年十二月））。

⑧ 本論文の第一稿脱稿後、中國國家圖書館ホームページの「中華古籍資源庫」において、石渠閣補刻本全冊の畫像が公開され、全文の調査が可能になった。ここでは執筆時の事情に鑑み、當時の状況に基づく本文のままとする。

⑨ 各本の詳しい書誌情報については、小松「『水滸傳』諸本考」五十七～五十九頁及び小松「『水滸傳』本文の研究——文學的側面について」（『京都府立大學學術報告 人文』第六十九號（二〇一七年十二月） 十二～十四頁を参照された）。

⑩ 「萬曆野獲編」（中華書局一九五九）一三九頁。

⑪ 井口千雪「三國志演義成立史の研究」（汲古書院二〇一六）「序章」一二二～一二三頁注46。

『水滸傳』石渠閣補刻本文の研究（小松）

⑫ 井口千雪「明朝動威武定侯郭氏と文學——家譜・年譜——」（『京都府立大學學術報告 人文』第68號（二〇一六年十二月） 一一三頁）。

⑬ 「『水滸傳』諸本考」八八～八九頁。

⑭ 馬幼垣「從掛名天都外臣序本『水滸傳』的插圖看該書素質」（『水滸傳』四一一～四二二頁）。

⑮ 宮内廳書陵部藏徳山毛利家舊藏「忠義水滸全傳」による。

⑯ 周亮工「書影」（上海古籍出版社一九八二）八～九頁による。

⑰ 通常の致語の定義については、何心「水滸研究」（上海文藝出版社一九五四。ここでは上海古籍出版社一九八五の増訂本による）七「致語」與「燈花婆婆」一一五～一二一頁參照。

⑱ 鄧雷「『水滸傳』天都外臣序言考辨」（『臨沂大學學報』第37卷第1期（二〇一五年二月））の指摘による。「玉劍尊聞」の本文は上海古籍出版社一九八六の順治十四年序刊本影印四〇八～四一三頁による。

⑲ 『續修四庫全書』第一一四三冊五六六頁の影印による。

⑳ 「『水滸傳』諸本考」八八～八九頁。

㉑ 「致語」については、何心の⑰前掲書以下言及が多い。詳しくは高島俊男前掲論文注（27）參照。従来の研究においては、全體に「致語」が存在したことは否定的であり、何心をはじめとして各回頭の詩詞のことであると見る意見が多い。

「燈花婆婆」については、堀誠「燈花婆婆」話本考」（『中國文學研究』第六號（一九八〇年十二月））参照。

②② 王重民「中國善本書提要」（明文書局一九八四）「集部總集類」四三〇頁。なお洪梗刊の『唐詩紀事』は「四部叢刊」に收められている。

②③ 「明實錄」世宗」卷五一五 嘉靖四十一年十一月丁亥、『萬曆野獲編』補遺卷二「吏部」二「胡暴貴不終」八四二頁。

②④ この点については小松「中國古典演劇研究」（汲古書院二〇〇一）Ⅱの第四章「明刊本刊行の要因」一五〇～一五七頁を参照。

②⑤ 小松「『水滸傳』本文の研究―「表記」について」（『和漢語文研究』第十五號（二〇一七年十一月））一三二～一三三頁。

②⑥ 「『水滸傳』本文の研究―「表記」について」六～七頁。

②⑦ この点については氏岡真士「容與堂本『水滸傳』3種について」（『中國古典小説研究』第19號（二〇一六年三月））及び「水滸傳諸本考」八二～八八頁参照。

②⑧ 「『水滸傳』本文の研究―「表記」について」七～十一頁。

②⑨ 「『水滸傳』諸本考」（全體にわたるため、ページ数は示さない）。

③⑩ 馬幼垣「嘉靖殘本《水滸傳》非郭武定刻本辨」（『水滸二論』三聯書店二〇〇七）所收。該箇所は同書七十四頁。佐藤晴彦「國家圖書館藏『水滸傳』殘卷について」嘉靖本か？」（『日本中國學會報』第五十七號（二〇〇五年十

月）・荒木達雄「嘉靖本『水滸傳』と初期の『水滸傳』文繁本系統」・『水滸傳』諸本考」。

③⑪ 荒木達雄「石渠閣出版活動和《水滸傳》之補刻」。

③⑫ 笠井直美「李宗侗（玄伯）舊藏『忠義水滸傳』」（『東洋文化研究所紀要』百三十一冊（一九九六年十一月））。

③⑬ 「『水滸傳』本文の研究―文學的側面について」三一～三五頁。

③⑭ 「『水滸傳』本文の研究」65～70頁。

③⑮ 「『水滸傳』本文の研究」の全體にわたってこの問題を論じているため、ページ数を附さない。ただし、同論文は芥子園本系統のテキストの存在を見落とし、百二十回本を用いて議論を進めており、同論文末の系統圖にも、ミスプリントも含まれて誤りが多い。この点は「『水滸傳』本文の研究―文學的側面について」一一～一七頁で修正を加えている。ここに示す系統圖は、同論文に掲載した修正後のものである。